北洋産底魚(ツノガレイ、マダラ、スケトウ、 およびキチジ)の水銀およびセレンレベル*1

武田道夫·上田 正^{**2}·片岡昭吉^{**3}·乾 栄一^{*4}

The Level of Mercury and Selenium in Some Demersal Fishes (Alaska Plaice, Alaska Pollack, Pacific Cod, and Thornhead) from Bering Sea

Michio Takeda, Tadashi Ueda Akiyoshi Kataoka, and Eiichi Inui

The levels of mercury and selenium in the muscle, liver, and gonad of Alaska plaice (*Pleuronectes pullasi*). Alaska pollack (*Theragra chalcogramma*), Pacific cod (*Gadus morhua macrocephalus*) and thornhead(idiot; *Sebastolbus macrochir*) trawled from Bering Sea were determined by flameless atomic absorption— and fluoro—spectrophotometry, respectively.

Total mercury content (T-Hg) in the muscle of each species correlated significantly with body length. The mean T⁺ Hg in the muscle were 0.05 ± 0.01 for Alaska plaice, 0.03 ± 0.02 for Alaska pollack, $0.03 \pm 0.00_{\rm f}$ for Pacific cod, and $0.25 \pm 0.01 \ \mu {\rm g g}^{-1}$ for thornhead.

Methyl mercury content(MeHg) determined by gas—liquid chromatography correlated significantly with T Hg in the muscle for each species. The mean ratio of MeHg to T—Hg were more than 75% in the muscle of Alaska plaice. Alaska pollack, and Pacific cod, while that for thornhead was not more than about 35%.

The mean T-Hg of liver were 0.06 ± 0.01 for Alaska plaice, 0.02 ± 0.01 for Alaska pollack and $0.01 \pm 0.00_5 \ \mu g \, g^{-1}$ for Pacific cod. The mean T-Hg of gonad were 0.03 ± 0.02 for Alaska plaice. $0.02 \pm 0.00_5$ for Alaska pollack, and $0.01 \ \mu g \, g^{-1}$ for Pacific cod.

The mean sclenium level of muscle were 0.64 ± 0.23 for Alaska plaice, 0.20 ± 0.05 for Alaska pollack, 0.25 ± 0.06 for Pacific cod, and $0.34 \pm 0.04 \ \mu g \ g^{-1}$ for thornhead. The mean Se/Hg(molar ratio) of muscle were 37 ± 19 for Alaska plaice, 19 ± 8 for Alaska pollack, 26 ± 6 for pacific cod, and 4 ± 0.4 for thornhead. The mean setenium content of liver of Alaska plaice was $3.51 \pm 1.11 \ \mu g \ g^{-1}$. The gonads of Alaska plaice and Alaska pollack contained 0.83 ± 0.40 and $0.33 \ \mu g$ of sclenium g^{-1} on the average, respectively.

^{※1-}一部は昭和54年10月19日、日本化学会第40回秋季合同大会(於九州大学)にて発表。

^{※2} 水童大学校製造学科

^{※3} 水産大学校練習船耕洋九

^{※4} 農林水産省西海区水産研究所調査船陽光丸

1.緒 言

海産生物の水銀レベルは、その生物の成長度、食物連鎖上の位置および生息海域と関係があ ると考えられている¹⁾。また、外洋性大形魚に蓄積されている水銀が、天然由来である限り、 セレンを伴って吸収蓄積されるので、その毒性は低いと推察されている²⁾。しかし、海産生物 が水銀を蓄積する機構、生物種によって含有する水銀形態およびセレンとの相対比が大きく相 違する理由については、まだ、不明である。

先に著者らは、含有水銀レベルが高いグループのマグロ類、カジキ類およびサメ類等の水銀 とセレンに関する分析結果を報告してきた¹⁾。今回は、食物連鎖上の位置がプランクトン フィーダーに近く、含有水銀レベルが低いと考えられる北洋(ベーリング海)産底魚のツノガレ イ(Pleuronectes pullasi)³⁾、スケトウ(Theragra chalcogramma)およびマダラ(Gadus morhua macrocephalus)について、水銀とセレンの体内分布を検討した。また、同一海域に生息する底 魚でありながら、その成長度に対して、比較的高い水銀レベルを示すメスケと同類のキチジ (Sebastolobus macrochir)の筋肉についての分析結果も伴せて報告する⁴⁾。

2. 実験方法

2・1 試料魚

1977年6月、水産大学校練習船耕 洋丸がアリューシャン海域で漁獲し たツノガレイ30尾、スケトウ16尾お よびマダラ16尾を試料とした。試料 魚の漁獲位置をFig.1に、体長お よび体重の範囲とそれらの平均値を Table 1 に示した。

試料魚は船内で凍結した後、 -20℃で保蔵した。この凍結試料魚 を解凍後、普通肉、肝臓および性腺 を分取し、細砕して分析に供した。



また、キチジについては、アラスカ産の無頭、無内臓の凍結商品10尾を試料としたため、その生物測定値は不明である。

2·2 総水銀定量法⁵⁾

細砕試料を、五酸化バナジウムを酸化助剤として、硫酸--硝酸混液によって加熱分解した。 この分解液中の水銀量を還元気化原子吸光法によって求めた。その水銀量を湿潤試料1 g 当た りの µgとして計算し、その値を総水銀量(以下 T-Hg と略す)とした。各試料について測

- 2 ---

FRANCISCO DE LA CONTRACTORIA DE LA	No. of	Body weight (g)		Body length (cm)		Sex		-
Speies	specimen	Mean	Range	Mean	Kange	Male	Female	
Alaska plaice	30	333.8	134-575	30.4	23.0-37.0	19	11	
Pleucronectesi pullasi								
Alaska pollack	16	1095.5	165-3400	51.4	30.5-80.0			
Theragra chalcogramma								
Pacific cod	16	557.7	508636	36.9	34.0-38.0			
Gadus morhua macrocephalus								
Thornhead (idiot)	10	(dressed specimens)						
Sebastolobus macrochir								

Table 1. Species, size, and sex of specimens from Bering Sea

定を5回操り返し、その平均値を求めた。

2・3 メチル水銀定量法6)

細砕試料を塩酸酸性ペンゼンで処理して、抽出した塩化メチル水銀をシスティン溶液でク リーンアップし、ペンゼン液相へ移行した。このペンゼン溶液中のメチル水銀量を、α-クロ ロナフタレンを内部標準物質とするガスクロマトグラフィーにより求めた。同一試料につい て、3-6回、測定を繰り返し、その測定値の差が0.01 μgg⁻¹以上の場合は、さらに測定 を繰り返した。分析結果は湿潤試料 1 g 当たりの塩化メチル水銀態水銀重量 (μg)として表 した(以下この値を MeHgと略記する)。

2・4 セレン定量法⁷⁾

細砕試料を硝酸ー過塩素酸ー硫酸系分解剤で加熱処理した。分解液中のセレン酸を過酸化水 素水で還元した後、2・3-ジアミノナフタレンを蛍光発色剤とする蛍光法により定量した。 測定は、同一試料について5-6回繰り返し、その測定値の変動係数が30%以下の場合の値を 採用して、その平均値を求めた。湿潤試料1g当たりのセレン重量(µg)として表した。

3. 結果と考察

3・1 ツノガレイの水銀量

3・1・1 筋肉の T--Hg: 試料30検体の筋肉の T--Hg の分布範 囲は0.02-0.07、平均値は0.05±0.01 µgg⁻¹であった。試料魚の体長と筋 肉 T--Hg との関係を、Fig. 2に示した。 すなわち、両者の対数値間には、 Table 2 に示したように、相関係





- 3 -

 Table 2. Statistical analyses of mercury and sclenium level in some demorsal fishes from

 Bering Sea

Species	<u>x</u>	<u>y</u>	
Alaska plaice	body length (log)	T-Hg of muscle(log)	0.54**
	T-IIg of muscle	Mellg of muscle	0.76**
	T-Hg of muscle	T-llg of liver	0.40*
	body length (log)	T Ilg of liver (log)	0,31
	body length (log)	Se of muscle(log)	0.20
	T-llg of muscle	Se of muscle	0.20
	Se of muscle	Se of liver	0.43
	T-Hg of liver	Se of liver	0.01
Alaska pollack	body length (log)	T-Ilg of muscle (log)	0.51*
	body length (log)	T~Hg of liver(log)	-0.30
	T-llg of muscle	Mellg of muscle	0.84**
	T-Ifg of muscle	T-Hg of liver	0.30
	body length (log)	Se of muscle(log)	0.29
	T-Hg of muscle	Se of muscle	-0.33
Pacific rod	body length (log)	T-Hg of muscle (log)	0.10
Factor (00	T-llg of muscle	Mellg of muscle	0.78**
	T-IIg of muscle	T-llg of liver	0.58
	T-Hg of muscle	Se of muscle	0.41
Thornhead	T-llg of muscle	Mellg of muscle	0.78**
1 II Minicadi	T-llg of muscle	Mellg/T-Hg	0.74*
	T-llg of muscle	Se of muscle	0.64^{1}

(regression equation : y = mx + b or $\log y = m\log x + b$)

** Significant at 0.01 level, * significant at 0.05 level, ¹ significant at 0.1 level.

T-Hg : Total mercury, MeHg : methyl mercury, Se : sclenium.

r. Correlation coefficient.

数 n = 0.54[>r (28, 0.01)] で、一次の相関関係が、有意水準 0.01で認められる。ツノガレ イ筋肉の T-Hg は、その成長度と共に増加し、他の多くの魚種と同一傾向を示した。また、 筋肉 T-Hg を性別に分けての平均値を求めると、Table 3 に示したように、雄(19尾) 0.05± 0.01、雌(11尾) 0.05±0.01 µg g⁻¹となり、性別による有意差は認められなかった。

3・1・2 筋肉の MeHg : 試料魚27尾の MeHg は、Table 3 に示したように、分布 範囲 0.01-0.07、平均値0.04±0.01 $\mu g g^{-1}$ であった。また、体長と MeHg のそれぞれの対 数値の間には、 $r_{\theta} = 0.47[>r(25, 0.05)]$ で、有意の一次相関が認められた。

筋肉における MeHg の性別平均値の間には、Table 3 に示したように、0.05水準で有意差が 認められ、雄の方が、やや高い傾向にあると言える。

筋肉の T-Hg と MeHg との関係を Fig. 3 および Table 2 に示した。すなわち、両者の間には、 r₀ = 0.76 [>r (25, 0.01)] で、有意水準 0.01の相関が認められた。すなわち、ツノガレイ筋 肉中の水銀は、メチル水銀として蓄積されていると言える。また、MeHg/T-Hg の平均値は、 Table 3 に示したように、雄 (17尾) 79±22、雌 (10尾) 68±13%であるが、i-検定の

Organ	Determination	Sex	н	Range	Meau	to and DF	
Musche	T -IIg $(\mu g g^{+1})$	sum	30	0.02-0.07	0.05±0.01		
		male	19	0.02 - 0.07	0.05 ± 0.01	0/901	
		female	11	0.03-0.07	0.05±0.01	01267	
	Mellg(µg g ^{~1})	sum	27	0.01-0.07	0.04±0.01		
		male	17	0.01 - 0.07	0.04 ± 0.02	9. 920 (98X *	
		female	10	0.02-0.06	0.03 ± 0.01	4.439(43)	
	MeHg/T-Hg(%)	sum	27	40-100	75±20		
		male	17	40-100	79 ± 22	0.002 (25)	
		female	10	43- 86	68 ± 13	0.003(25)	
	Scienium (µg g ⁼¹)	Sum	27	0.39-1.25	0.64±0.23		
		male	17	0.41-1.25	0.67 ± 0.25	() 125 (25)	
		female	10	0.39-0.97	0.59 ± 0.18	0,125(25)	
	Se/Hg(molar ratio)	sum	27	19-107	3 7 ±19		
		nale	17	21 - 107	40 ± 22	A 069 (91.)	
		female	10	19- 57	32 ± 12	0,002(23)	
Liver	$T-IIg(\mu g g^{-1})$	รแม	28	0.02-0.14	0.06±0.01		
		male	17	0.03-0.14	0.06±0.03	0 AL9 (9:1 ¥	
		temale	11	0.02-0.09	0.05 ± 0.02	4.0453253	
	Selenium (µg g ⁻¹)	sum	13	1.85 -5.83	3.51±1.11		
	,	male	7	2.23-5.83	3.89±1.17	a .an/	
		female	6	1.85-4.35	3.06 ± 0.94	0.108(11)	
	Se/Hg (motar ratio)	sum		41-326	169 ± 86	* • • • • • • • • • • • • • • • • •	
		male	5	41 - 276	120 ± 58	5 app (a)	
		female	6	94 - 326	211 ± 86	-0.003(9)	
Gonad 	$T \cdot llg(\mu g g^{-1})$	รมณ	11	0.01-0.07	0,03±0.02		
		male	3	0.02 - 0.07	0.05 ± 0.03		
		female	8	0.01-0.06	0.03 ± 0.01		
	Selenium (µg g ⁻¹)	ទព៣	Ш.	0.33-1.57	0.83±0.40		
	·	male	4	1.05~1.57	1.28 ± 0.25	a	
		female	7	0.33 - 0.79	0.59 ± 0.19	Z.464 (9)*	
	Se/Hg (molar ratio)	sum		38-84	56±19		
		male	1	38	38		
		female	7	38 - 84	58 ± 19		

Table 3. T-Hg, MeHg, MeHg/T-Hg, Selenium and Se/Hg of muscle, liver and gonad of Alaska plaice

 L_0 : "t" for testing the difference in the mean value.

Code adress 1 DF = degree of freedom, T-Hg 1 total mercury content, MeHg 1 methyl mercury content,

* : Significantly different between the sexes at 0.05 level.

結果では、性別による有意差は認められなかった。全試料の Mellg/T-llg の平均値は75±20% であるので、ツノガレイ筋肉中の水銀は大部分がメチル水銀態として存在し、他の多くの魚種 と同じような蓄積傾向を示していると推論できる。



3・1・3 肝臓の T-Hg : 試料魚28尾の肝臓の T-Hg は、その分布範囲 0.02-0.14、 平均値0.06±0.01 $\mu g g^{-1}$ であった。これらの値を筋肉のそれと比較すると、それぞれの下限 値は0.02 μg と同一レベルであるが、上限値は筋肉が0.07に対し、肝臓のそれは 2 倍高い0.14 $\mu g g^{-1}$ であった。そこで、その両者の関係を Fig. 4 に示した。すなわち、筋肉と肝臓の T-Hg 間には、 $r_0 = 0.40[>r(26, 0.05)]$ の有意の一次相関が認められた。しかし、筋肉と肝臓 のそれぞれの T-Hg を比較すると、肝臓の値の方が高いものが16試料、相等しいものが 6 試料、 筋肉の方が高いものが 5 試料 あった。この分布状態について χ^{2-} 検定した結果、 $\chi^{2}_{0} > \chi(1, 0.05)$ となり、有意水準 0.05で肝臓の T-Hg の方が筋肉のそれより高いと推測 できる。先に報告したマグロ類¹⁾および養殖ハマチ⁸⁾では、いずれも筋肉の水銀レベルの方が、 肝臓のそれより約 2 倍または以上高かった。このことは、ツノガレイが水銀に対して特異な生 理機能を持つことを示唆しているのかも知れない。

雄17尾、雌11尾の肝臓の T-Hg の性別平均値の間には、Table 3 に示したように *l*=2.043 [>*t* (25, 0.05)]の有意差があり、雄の方がやや高いことが認められた。

なお、ツノガレイ肝臓の T--Hg と体長のそれぞれの対数値間には、Table 2 に示したように、 有意の相関は認められなかった。

3・1・4 性腺の T-Hg : 精巣 3 検体の T-Hg は分布範囲0.02-0.07、平均値0.05 ±0.03 μ g g⁻¹、卵巣 8 検体の T-Hg は分布範囲 0.01-0.06、平均値 0.03±0.01 μ g g⁻¹で あった。また、雌雄を一緒にした平均値は0.03±0.02 μ g g⁻¹で、これらの性腺に対応する筋 肉のそれは、0.05±0.01 μ g g⁻¹となり、t-検定の結果、筋肉の T-Hg の方が、性腺のそれよ り高いと認められた。

以上の結果、本実験に供試したツノガレイの組織の水銀レベルの順序は、肝臓>筋肉>性腺 となる。 3・2 ツノガレイのセレン量

3・2・1 筋肉のセレン量: 27 検体の筋肉のセレン量を Table 3 に 示した。その分布範囲は、0.39-1.25、 平均値は0.64±0.23 µgg⁻¹であり、 雌雄による平均値の差に有意性は認め られなかった。体長と筋肉のセレン量 について、それぞれの対数値間の関係 を下ig.5 に示した。両者間には、n= 0.2[<r(25, 0.1)] で、有意の相関 は認められなかった。このことは、既 に報告⁹⁹した多くの魚種の場合と同一 結果であり、セレンは魚類にとっては 必須元素で、その成長度に関わり無く、 ある量が保持されているものと推察さ れる。

ツノガレイ筋肉の T-Hg とセレン 量との関係を Fig. 6 に示した。図よ り明らかなように、両者の間の一次回 帰式に対しては、ra=0.20[<r(25, 0.1)] となり、有意の相関は認められ ない。このことは、今まで調査してき た魚種における結果と同一であった¹⁰⁾。



level in muscle and body length of Alaska plaice





3・2・2 肝臓のセレン量 : 肝臓13検体のセレン量は、その分布範囲、1.85-5.83、 平均値3.51±1.11 µg g⁻¹であった。肝臓のセレン量と対応する試料魚の体長、肝臓の T-Hg、 または、筋肉のセレン量との間には、Table 2 に示したように、ro はそれぞれ、-0.03、0.01 および0.43で、いずれも有意の相関は認められない。

肝臓のセレン量と対応する試料魚13検体筋肉のそれとの比は、3.4-9.4であり、その平均値 は5.4±1.7であった。すなわち、ツノガレイでは肝臓のセレン含量は筋肉のそれより約5倍高 い。しかし、先に報告したキハダの場合は、肝臓のセレン量は筋肉のそれの約45倍であり、ツ ノガレイにおける値との間に10倍近い違いが見られる。

肝臓セレン量の性別平均値間には、Table 3 に示したように有意の差は認められなかった。 3・2・3 性腺のセレン量 : 精巣 4 検体と卵巣 7 検体の平均セレン量は、それぞれ、 J.28±0.25および 0.59±0.19 μgg⁻¹であった。これらの平均値の差の有無についての ι-検 定の結果は、Table 3 に示したように、水準0.05で有意の差が認められ、卵巣に比し精巣によ り多くのセレンが含有されることが認められた。

性腺のセレン量と対応する試料魚の筋肉および肝臓のセレン量とを比較すると、平均値で雄 では、筋肉 0.82±0.27、肝臓 3.95±0.69 $\mu g g^{-1}$ となり、雌では筋肉 0.61±0.21、肝臓 3.00±1.10 $\mu g g^{-1}$ であった。すなわち、この3つの組織のセレンレベルを比較すると、雌雄 共通して肝臓のセレンレベルが、他のそれに比較し約3-5倍高いことが明らかとなった。

3・3 スケトウの水銀およびセレン量

3・3・1 筋肉の水銀量 : 試料魚16尾の筋肉の T-Hg を Table 4 に示した。分布範囲 は0.01-0.07、平均値0.03±0.02 µg g⁻¹であった。試料魚の体長と T-Hg の関係を Fig. 7 に示した。すなわち、両者の対数値間の一次回帰係数には、ra=0.51[>r(14, 0.05)] で有 意が認められ、スケトウでは、他の多くの魚種と同じように、成長と共に筋肉の水銀レベルが 高くなると考えられる。しかし、前記のツノガレイに比較すると、体長、体重共にスケトウの 方が大きいのに関わらず、その T-Hg は低い。

筋肉の MeHg については、分布範囲0.01-0.08、平均値0.03±0.02 μg g⁻¹で、T-Hg の

Species	Organ	Determination	11	Range	Mean
Alaska pollack	muscle	$T-Hg(\mu g g^{-1})$	16	0.01-0.07	0.03±0.00
Theragra chaleogramma		$MeHg(\mu g g^{-1})$	16	0.01-0.08	0.03 ± 0.02
		Selenium (µgg ⁻¹)	14	0.12-0.30	0.20 ± 0.05
		Se/Hg(molar ratio)	14	7-36	19± 8
	liver	$T-Hg(\mu g g^{-1})$	16	0.01-0.05	0.02±0.01
		$Mellg(\mu g g^{-1})$	14	0.01-0.03	$0.01_5 \pm 0.00_7$
	ovary	$T-Hg(\mu g g^{-1})$	5	0.01 - 0.03	0.02±0.00,
		Sclenium (µg g ⁺¹)	2	0.33, 0.74	0.33
		Se/Hg(molar ratio)	2	63, 84	73
Pacific cod	muscle	$T-Hg(\mu g g^{-1})$	16	0.02-0.03	0.03±0.005
Gadus morhua		$Mellg(\mu g g^{-1})$	16	0.02-0.04	0.03 ± 0.008
macrocef-halus		Scientium ($\mu g g^{-1}$)	12	0.19~0.38	0.25 ± 0.06
		Se/Hg(molar_ratio)	12	19 - 38	26± 6
	liver	T-Hg(_{Jt} g g ^{= 1})	8	0.01-0.02	0.01±0.005
	testicle	T-Hg(µg g ⁻¹)	1		0.01
Thornhead (Idiot)	muscle	T~llg(µg g ⁻¹)	10	0.23-0.26	$0,25 \pm 0.01$
Sebastolobus macrochir		$Mellg(\mu g g^{-1})$	10	0.04-0.14	0.0910.03
		Selenium ($\mu g g^{-1}$)	9	0.28-0.41	0.34 ± 0.04
		Se/Hg(molar ratio)	9	3 - 4	4 ± 0.4

Table 4. Mercury and selenium level of Alaska pollack, Pacific cod, and thornhead

n: Number of determinations.

それらと、ほぼ同じレベルであった。 T-Hg と MeHg との関係を Fig. 8 に 示した。両者の間は、n=0.84 [>r (14, 0.01)]の極めて高い相関関係 が認められ、図からも明らかなよう に、スケトウ筋肉中の水銀は、ほと んどメチル水銀態として存在してい ると考えることができる。

3・3・2 肝臓の水銀量 : スケトウ16尾の肝臓の T-Hg の分 布範囲は0.01-0.05で、その平均値 は0.02±0.01 µg g ⁻¹であった。肝 臓の T-Hg と、体長または筋肉の T-Hg との間の r₀ は、それぞれ、 -0.30と0.30で、共に有意の相関は 認められなかった。

肝臓の MeHg の分布範囲は0.010.03(国試料)で、平均値は0.01₅
±0.00₇ µg g⁻¹で、また、MeHg と
体長との間に有意相関は認められな
かった。肝臓の MeHg と T-Hg と
の比の平均値は、106±35%で、筋
肉中と同じように、肝臓中の水銀は
メチル水銀態として存在すると推察
される。



FIG. 8 . Correlation between total mercury and methyl mercury in muscle of Alaska pollack

3 · 3 · 3 卵巣の水銀量 二 卵巣の試料数は 5 個であるが、その T-Hg の分布範囲は 0.01-0.03、平均値0.02±0.00g µg g⁻¹であった。前記の筋肉や肝臓の水銀量と同じように、 スケトウ卵巣の水銀レベルも低い。

- 3・3・4 スケトウのセレン量 : スケトウ14尾の筋肉セレン量の分布範囲は0.12-0.30、平均値0.20±0.05 µgg⁻¹であった。試料魚の体長との間の相関をFig. 9 に示した。 両者の対数値間の一次回帰係数は、n==-0.29[<r(12, 0.1)] で有意と認められない。すな わち、スケトウ筋肉のセレンレベルは成長とは無関係であり、他の魚種と同一結果であった。 スケトウ筋肉のT-Hgとセレン量との関係をFig.10に示したが、両者の間には、n==-0.33[< r(12,0.1)]で、有意の相関は認 められない。このことは、魚類筋肉 中のセレンは必須元素として、成長 度や水銀レベルと無関係に、ある一 定量以上が保持されるという推論を 支持するものであろう。

スケトウ筋肉セレン量は、前述の ツノガレイ筋肉の平均値0.64 μg g⁻¹ と比較すると約¹/3と低い。

スケトウ卵巣は2検体のみである が、そのセレン量は、0.33と0.74 μgg⁻¹で、ツノガレイの場合と、 ほぼ同程度のレベルであった。

3・4 マダラの水銀およびセレン量

マダラ筋肉(16尾)の T-Hg は、 Table 4 に示したように、分布範囲 0.02-0.03、平均0.03±0.00₅ µg g⁻¹と非常に低い値であった。体長 と T-Hg との間には、Table 2 に示



Fig. 9. Correlation between selenium level in muscle and body length of Alaska pollack



-19. 10. Correlation between total mercury and selenium in muscle of Alaska pollack

したように to = -0.10[<t(14, 0.1)]で有意の相関は認められなかった。

マダラ筋肉の MeHg も低い値で(Table 4)、対応する T-Hg との間には、r₀=0.78 [>r (14, 0.01)] で、高い相関を示した(Table 2)。MeHg の T-Hg に対する比も、ほぼ1 で、マダラ 筋肉中の水銀はメチル水銀態として存在していると推察される。

マダラ肝臓(8 検体)の T-Hg は平均 $0.01\pm0.00_5 \ \mu g g^{-1}$ で、筋肉のそれより、さらに、 低いレベルであった。肝臓の T-Hg と対応する筋肉のそれとの間には、n = 0.58 [<r(6, 0.1)] で、有意の相関は認められなかった(Table 2)。

マダラ精巣の T-Hg は、1 検体のみであるが、0.01 μg g⁻¹で、他の組織と同様に低い値で あった。

マダラ筋肉のセレン量(12検体)は、Table 4 に示したように、分布範囲 0.19-0.38、平均 0.25±0.06 μg g⁻¹で、ツノガレイのそれより低く、スケトウのレベルより高い。マダラ筋肉 のT-Hg とセレン量との関係を Fig. 11に示した。両者の間には ω=0.41 [<r(10, 0.1)]で、 有意の相関は認められず、他の魚種と同じ傾向が認められた。 3・5 キチジの水銀およびセレン

量

キチジ試料は漁船内で頭部および腹 部を除いた冷凍品10尾を用いた。その 重量の分布範囲は246-439、平均は 310±60 g であった。

このキチジ筋肉の T-Hg は Table 4 に示したように、分布範囲0.23-0.26、 平均0.25±0.01 µg g⁻¹で、前記 3 魚 種の筋肉 T-Hg に比べると、かなり 高い値であった。

また、MeHg の分布範囲は0.04-0.14、平均は0.09±0.03 µgg⁻¹で、 T-Hg と の 間 に は Fig. 12 お よ び Table 2 に示したように、ro=0.78 [> r(8, 0.01)] で、有意の相関が認め られた。一方、MeHgとT-Hgとの比 は、範囲17-56、平均35±13%で、低 い値であった。今までの調査結果では、 多くの魚類では肝臓、脾臓、腎臓およ び血液では、MeHg/T-Hg 値が低い例 は見られたが、筋肉におけるその比が、 このように低いことは、カジキ類¹¹⁾ 以外では、その例が無く、極めて珍し



Fig. 11. Correlation between total mercury and selenium in muscle of Pacific cod



Fig. 12. Correlation between total mercury and methyl mercury in muscle of thornhead

い。筋肉中の水銀で、メチル水銀以外の形態は無機態であろうと推測されているが、まだ、確 認されてはいない。また、メチル水銀の無機化機構も明らかとは言えない¹²⁾。

キチジは前記の底魚と異なり、卵胎生であり、遠洋性大形魚に比べて、体長・体重、共に小 さいのにも関わらず、筋肉中の水銀レベルはマグロ類に匹敵する。しかし、一方、MeHg/T-Hg 値は30%程度で、極めて低い。これらの特殊性がキチジの生態とどのような関わりがあるのか、 極めて興味ある問題である。また、含有水銀の内、無機態が多いならば、食品衛生土からもさ らに完明すべき点であろう。

キチジ筋肉のセレン量は Table 4 に示したように、分布範囲は0.28-0.41、平均値0.34± 0.04 μ_{8 8}⁻¹(9 検体)であり、前記のツノガレイ筋肉のそれより低く、スケトウおよびマダ ラ筋肉のそれより高いレベルにあっ た。キチジ筋肉の T-Hg とセレン量 との間には、Fig. 13と Table 2 に示し たように、n=0.64 [>r(7,0.1)] の有意水準0.1で相関が認められた。 すなわち、キチジ筋肉の水銀はセレン を伴って蓄積されていると考えること もできる¹³⁾。



Fig. 13. Correlation between total mercury and selenium in muscle of thornhead

3・6 ツノガレイ、スケトウ、マ

ダラおよびキチジの水銀とセレンの関係

海洋生物中の水銀は環境水中より直接プランクトンが体内に濃縮したものを食物連鎖を通じ て、捕食生物により段階的に濃縮されることが考えられている。この際、セレンを伴って蓄積 されるので、水銀の毒性が抑制されると推察されている。この推論に立てば、食物連鎖上位の 生物では、必須元素として保持しているセレンレベルに、水銀に伴われて摂取されるセレンが 附加されるはずである。そこで、前述の分析データに基づいて、セレンと水銀のモル比を計算 した。その結果をツノガレイについては Table 3 に、スケトウ、マダラおよびキチジについて は Table 4 に示した。各魚種の筋肉における Se/Hg (モル比)の平均値は、ツノガレイ 37±19、 スケトウ 19±8、マダラ 26±6 およびキチジ 4±0.4であった。キチジはその筋肉の T-Hg が他の 3 魚種のそれより 1 桁高いオーダを示し、Se/Hg は 1 桁代で、明らかに食物連鎖上では 高い位置にあることが分かる。

このことを確かめるために、さらに、各試料魚を、その T-Hg およびセレン量が各手均値 より高いグループと低いグループとに分け、その各グループごとの平均値の差、すなわち、摂 取餌より持ち込まれた水銀とセレン量を示す値を次式で求めた。

 $\Delta Hg = \frac{m_1 - m_2}{Hg}$

$$\Delta Se = \frac{s_1 - s_2}{Se}$$

$$\Delta \text{ Se}/\Delta \text{ Hg} = \frac{(s_1 - s_2)/\text{Se}}{(m_1 - m_2)/\text{Hg}} = (2.54) \frac{(s_1 - s_2)}{(m_1 - m_2)}$$

mi:平均 T-Hg より高いグループの平均 T-Hg、m2:平均 T-Hg より低いグループの平均 T-Hg、s1:平均セレン量より高いグループの平均セレン量、s2:平均セレン量より低いブルー プの平均セレン量、Hg:水銀原子量、Se:セレン原子量。 計算の結果は、水銀ーモルに伴って蓄積されるセレンのモル数は、ツノガレイ 14、スケト ウ 5、マダラ 8、キチジ 7となり、いずれもセレンは、水銀のみに伴われて蓄積するとは 限らないことを示している。

また、海水における Se/Hg(モル比)は約50で、プランクトンに関する分析値も約55¹⁰で、 ほぼ等しい。そこで、プランクトンフィーダーに近い食性を持つ魚種は Se/Hg 値が50に近く、 食物運鎖位置の高い魚種は、その比が1 に近くなるものと推測できる。キチジ筋肉における Se/Hg は 4 で、マグロ筋肉のそれとほぼ、同じレベルであるが、その取込み方は、必ずしもマ グロ類の傾向と同じではない。このことは、キチジ筋肉では必須元素として保有しているセレ ンレベルが高いので、餌より追加される水銀とセレンの値が、正確に算出されないことを示し ているのかも知れない。いずれにしても、キチジは特有な水銀蓄積を行う興味ある魚種と言え る。

ツノガレイの肝臓および性腺の水銀とセレンの比は Table 3 に、スケトゥ卵巣のそれは Table 4 にそれぞれ示した。すなわち、ツノガレイ肝臓では Se/Hg (モル比)の平均値は169± 86で、筋肉のそれより、ほぼ5 信高い値であるが、性腺の Se/Hg は筋肉のそれの約1.5倍に過 ぎない。なお、スケトゥ卵巣の Se/Hg は73で、筋肉の約4 倍であった。一般に、魚類肝臓の Se/Hg は、筋肉のそれより高く、ツノガレイ肝臓の Se/Hg (モル比) は、ビンナガ肝臓の値 145に類似していた。このように、肝臓における高セレンレベルは、単に水銀に対応して取込 まれるばかりでなく、複雑な生理機能に関わっているためであろう。

4.要約

ベーリング海で漁獲したツノガレイ、スケトウ、マダラおよびキチジの筋肉、肝臓および性 腺の水銀とセレンの含量を測定し、次のような結果を得た。

- 前肉の平均 T-Hg (μg_B⁻¹) は、ツノガレイ 0.05±0.01、スケトウ 0.03±0.02、マダラ 0.03±0.00₅、キチジ 0.25±0.01であった。また、ツノガレイ、スケトウおよびマダラの筋 肉中の水銀は、ほとんどメチル水銀態と推察されるが、キチジでは T-Hg に対し MeHg の 占める割合は約35%に過ぎなかった。
- 2) 肝臓の平均 T-Hg (μg g⁻¹) は、ツノガレイ 0.06±0.01、スケトウ 0.02±0.01、マダラ 0.01±0.005で、筋肉のそれとはぼ等しいか、または、より低い値であった。
- 4) 筋肉の平均セレン量(μgg⁻¹)は、ツノガレイ 0.64±0.23、スケトウ 0.20±0.05、マダ ラ 0.25±0.06、キチジ 0.34±0.04であった。また、筋肉中の平均 Se/Hg(モル比)は、ツ ノガレイ 37±19、スケトウ 19±8、マダラ 26±6、キチジ 4±0.4で、キチジは食物連

鎖上で、上位に位置する数値を示した。

- 5) ツノガレイ肝臓では、平均セレン量 (μg g⁻¹) は、3.51±1.11で、平均 Se/Hg (モル比) は169±86と高い値を示した。
- 6)性腺の平均セレン量(μgg⁻¹)は、ツノガレイ 0.83±0.40、スケトウ 0.33であり、また、 Se/Hg については、ツノガレイ 56±19、スケトウ 73の値が得られ、筋肉における値とほぼ 類似した。

本研究の分析を担当した、当時、水産大学校製造学科学生 梅村博文、江藤泰広、田中知加子、 徳本弘光、中内修二、浜 一司、角田 隆、立野 勉および前田有紀の諸君に厚くお礼申し上 げる。また、試料魚(キチジ)を供された株式会社ホクスイ 手塚久雄氏に深謝する。

〔文献〕

- 1) 例えば 武田道夫・稲益献二・越川虎吉・上田 正・中野道紀・冨田輝雄・浜田盛承:水産大研報、25、47-65 (1976)
- 2) H. E. Ganther, and M. L. Sunde J. Food Sci., 39, 1-5 (1974)
- 3) 大石圭一二かれい、恒星社厚生閣、pp. 30-39(1977)
- 4) S. Kamimura J. Bull. Japan. Soc. Sci. Fish., 41, 487 (1975)
- 5) 武田道夫·稲益献二·冨田輝雄·浜田盛承·勝浦 洋二水産大研報、23、145-153 (1975)
- 6) 上田 正·武田道夫:日水誌、43、1115-1121 (1977)
- W. Horwitz(ed), Official Methods of Analysis of the AOAC. ¹²th ed., AOAC. Washington, pp. 455 456 (1975)
- 8) 武田道夫·上田 正二日水誌、45、901-904 (1979)
- 9) 武田道夫·上田 正二水産大研報,26,267-279 (1978)
- 10) 甲斐徳久・土田 正・武田道夫・片岡昭吉二水産大研報、31、69-73 (1983)
- 11) N. Kai, T. Ueda, M. Takeda, and A. Kataoka 1 Bull. Japon. Soc. Sci. Fish., 52, 553-556 (1986)
- 12) 鈴木維美二微量元素と生体、秀潤社、p. 32 (1987)
- 13) N. Kai, T. Ueda, Y. Takeda, and A. Kataoka CBull. Japan. Soc. Sci. Fish., 53, 1697 (1987)
- 14) 武田道夫・片岡昭吉二下関女子短期大学紀要、3、1-8 (1984)